

変わる日本の「暮らし」と「まち」

団地商店街の空き店舗を利用し
多様な世代が集う居場所を作る

埼玉県北本市 北本団地
住宅付店舗のMUJIXUR
地域医療福祉拠点化

阿部民子

text by Ranko Abe



illustration: Shigeyuki Sakata

埼玉県のほぼ中央に位置する北本市。JR北本駅からは、新宿駅や東京駅まで直通で1時間弱。今年で市制50周年を迎える、典型的な東京のベッドタウンだ。

北本駅からバスで約7分の他にUR都市機構の北本団地がある。広々とした緑豊かな敷地内には、71棟の中低層住棟がゆったりと建ち並び、総戸数2094戸を誇る団地も、管理開始から50年が経過。住民の高齢化や商店街の空洞化などの課題を抱えている。

そうした課題を解消し、団地に的を、UR埼玉エリア経営部スタッフ活用計画課の^{しんがひであき}新谷英朗に聞いた。

「2020年3月、北本市とURは、共通の課題である高齢化への対応やコミュニティ活性化のため、『まちづくりに関する連携協定』を締結しました。それに基づき、北本団地のストックを活用して、互いの技術や情報を活かした連携を進めています。今回の店舗活用はその連携を土台にしたもので、北本市さんとURのほか、店舗の運営管理は北本市在住等の若者によるまちづくり会社である暮らしの編集室さん、2階住宅のリノベーションと情報発信は2012年から「MUJIXUR団地リノベーションプロジェクト」を手がけるMUJIXUR HOUSEさんが担当。良品計画さんも店舗の活動支援を担当。5者が連携して進めています」

URは、2階住宅リノベーションとコミュニティ活動に対して賃料優遇で活動をバックアップするほか、店舗近くにMUJIXURや若年層向けシンプルモダンプランの住戸を導入。「この活動を通

以前のよう賑わいや活気を蘇らせた。そんな思いを持つ関係者が集まって昨年からはまったプロジェクトの姿を追った。

商店街に活性化拠点を作る

プロジェクトの舞台は、北本団地の中心部にあるアーケード商店街だ。かつては大型スーパーや米屋、肉屋、飲食店などが並び、団地内外からの人でにぎわっていた。しかし、今は深夜まで営業しているスーパーや郵便局、理容室や診療所など必要なものはあると

して若い方に北本団地を知っていただき、団地に住みたいとかお店をやりたい人が増え、団地や周りの地域にも活性化の波を広げたい」と期待を寄せる。

ユニークなのが、北本市による「ふるさと納税型クラウドファンディング」の活動支援だ。北本市役所市長公室シティプロモーション・広報担当の林博司さんは「まちの活性化にふるさと納税をつなげたい、と今回の仕組みを考えました。特徴的なのが、返礼品がないにもかかわらず『元団地っ子として応援します』『活気ある団地に戻ってきますように』など、支援金と共に多くの応援メッセージをいただいたこと。多くの方の団地や地域への愛着を感じます。この仕組みが全国のモデルケースになればうれしいですね」と話す。2月に終了した寄付金額は、じつに200万円。資金は改装費や設備費用等に充てられる予定だといふ。

今回のプロジェクトで重要な役割を演じるのが、暮らしの編集室だ。北本団地にかつて住み、あるいは現在住んでいる、今年35歳の



北本団地の商店街は、雨にも濡れないアーケード街になっている。

はいえ、シャッターが目立つ。今年の1月、その一角の住宅付店舗で工事が始まった。1階はカフェやイベントなどができるシェアキッチンなどを備えたコミュニティスペースに、2階住宅は1階店舗

中学同級生によるまちづくり会社で、これまでも空き店舗を活用したシェアキッチンや市民参加型のワークショップなどを手がけてきた。カメラマンでもある江澤勇介さんは、18歳まで北本団地に住み、現在も北本市に暮らす。「小さい頃は団地の商店街で駄菓子を買って、公園に行けばいつでも友達がいきました。シャッター商店街になっていたのを見て、生まれ育った団地で何かできないかと、今回のプロジェクトに参加することにしました」

北本市観光協会職員としても働く岡野高志さんは北本団地在住だ。「我々のような団地出身者や在住者が橋渡しになって、今いる人たちが新しく入ってくる人をつなげられたら、使命感というより、『団地って面白い』という遊び心で取り組んでいます」と話す。理学療法士や介護福祉士、建築家のメンバーも加え、今後は健康相談やアーケードでのマルシェなどの活動も行っていきたいという。

多様な世代が暮らせる団地

URはまた、北本団地で多様な

世代が生き生きと暮らし続けられるよう、地域医療福祉拠点化にも力を入れている。UR埼玉エリア経営部ウエルフェア推進課の土師範子は「令和元年度から地域関係者の方々との意見交換を始めました。そのなかで、訪問介護事業者さん等の駐車スペースが課題となっていることがわかり、団地内に医療・介護事業者用駐車スペースを設けました。現在は、団地内にある高齢者向けラウンジを多世代向けのコミュニティスペースとして活用する計画や、生活支援アドバイザーの配置なども検討中です。今後、暮らしの編集室の拠点との連携も考えていきたいですね」と語る。

取材に訪れた3月上旬。工事が進む現場では、住民の方が「何ができるの?」「楽しみだね」と声をかけていく。多くの人の期待をのせて、この4月、団地と地域活性化の未来を担う拠点が、いよいよオープンする。

街に、ルネッサンス

 UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

【企画制作】新潮社